

が変わってくる。出演する俳優もそうだろう。また、人間の眼はごまかせても、カメラの眼はごまかせない。ホンモノはよく写るのである」と、生前の小津の言葉が残っている。本物とまがいものどでは映像から発する雰囲気はまったく違うということだ。多くの人と違って、たとえ気付かなくとも小津のような者の目はごまかせない。そして、そのこだわりや美意識は国や民族、もちろんを時空を超えて継がれていく。もし小津がそうしたことに無頓着であったのなら、あの時のパリでの行列はけっしてあり得なかつただろう。

ギャラリーを始めてつくづく思う。僕にとつて素晴らしい作品とは、作品に何が描かれているかどうかということより、その作品に雰囲気を感じられるかどうか、その作品を覆う空間の品格を高めることができるかどうか、が重要である。そんな作品を人々に伝えていきたいと思う。そうした作品は周りの風景を一変させるばかりか、人の人生をも変えてしまうなにかがある。僕はギャラリーで起こるそんなドラマを22年間ずつと見続けている。

先日のこと、いつものようにギャラリーには作品を展示していたのだが、初めて訪れてくれた女子高校生が発したことばに、ギャラリーという役割の大切さをつくづく教えてもらった気がした。「わたしは親や先生、そして友達とコミュニケーションすること上手ではないんです。でも今日、ここにいる作品たちと私の距離感がとつても心地良いんです。」人は自分のこころの奥にある、もしかしたら自分でさえ気付いていなかった、ほんとうに探しているものに出会えたとしたら、どれだけ勇気づけられるのだろうか。

ことばや文字は大げさないうことも、偽ることも簡単だ。でも作品はけっして嘘をつかない。そんな作品を感じ、受け取る人が増えたら、どんなにか人の世はもつと豊かになるのだろうか。そんなことを願う毎日である。

(敬称略)

森田俊一郎

気配

1989年師走、夜中の十二時も過ぎた時間だったろうか、ぼくはパリの中心街を歩いていた。フォーブルサントノーレ地区のある映画館の前、冬の真夜中というのに長蛇の列ができていた。ふと道端にあった垂れ幕を見ると「Yasujiro Ozu」という文字が目に入る。当時、ぼくは映画監督小津安次郎のことについて、詳しい知識を持ち合わせていなかった。しかし、異国で周りを外国人に囲まれた中にいると、こうしたシーンに出くわすだけで、こころの中になんとも言えぬ熱いものがジンと押し寄せてくる。誰でも自分たちが誇れたり、他の国を尊敬するのは経済の大小ではなく文化によることがきつと多いことだろう。

それから2年後、ぼくは福岡市中央区にある通称「げやき通り」にギャラリーをオープンし、それまでの人生とはまったく畑違いのアートに魅せられ、アートにより生み出される環境にも興味を抱き始めていた。アートがあることでどんなに人の人生が豊かになるのだろうか、そんなことを身を持って体験してきた。環境の中にもっと当たり前にアートが存在しても良いのではないか、そんなことも常々思っていた。そんなある日のことだ、小津安次郎監督作、映画「秋日和」のことを知る。

映画のワンシーンである。母親役の前節子の後ろには梅原龍三郎の薔薇の絵が掛けられ、艶やかな母親のイメージを表している。また、対面に座る娘役である司葉子の背景には山口蓬春の白い椿が映し出され、これから嫁いで行く娘の純朴なイメージを感じさせる。

監督小津は映画に使われる絵画や掛け軸など、すべて本物しか使わなかったという。「たとえば床の間の軸や置物が筋の通った品物といわゆる小道具のマガイ物を持ち出したのでは、私の気持ち